

発達障害のある看護学生に対する教育上の 困難と支援に関する文献検討 ——メタ統合を参考にした分析による検討——

川村 晃右・伊藤 弘子・十倉 絵美

要旨

目的：本研究では、文献をもとに発達障害のある学生に対する教育上の困難と支援の現状について明らかにすることを目的とした。

方法：医学中央雑誌 Web 版を用いて、「看護」「学生」「発達障害」などのキーワードで検出された 7 件の文献を対象とし、メタ統合の手法を参考に、具体的な記述を系統的に整理した。

結果・考察：発達障害のある学生に対する教育上の困難には【患者の思いに寄り添うことの困難さ】【自己統制の困難さ】【グループダイナミクス活用の不十分さ】【論理的な思考の困難さ】【指導の集積の困難さ】があった。これらは、社会的コミュニケーション障害や興味の限局が影響していることが推察された。

一方、支援には【自己統制力を高める支援】【援助場面の構造化による理解の促進】【言語情報の理解と表出の促進】【達成可能な方法への変更】【支援体制のマネジメント】があった。これらは、他学部でも行われている直接的、間接的な支援と符合していたが、実習や卒後の看護師としての職務を想定した支援については、さらなる検討が必要である。

キーワード：発達障害、看護学生、教育上の困難、支援、文献検討、メタ統合

I. 緒 言

本国の大学において、障害のある学生の在籍者数は急増しており⁽¹⁾、障害種別では発達障害が17.9% (2018年)を占めている⁽²⁾。

全国で283校を超える看護系大学においても⁽³⁾、発達障害などで学習が著しく困難であった看護学生が2.3%は存在している⁽⁴⁾。看護系大学では、患者との援助的関係を構築したうえで看護を行ったり、医療チームの一員として協働したりすることを学ぶ必要がある。そのため、机上の学習だけでなく、臨地実習を通じた学習が重要となる。しかし、代表的な発達障害のひとつである自閉症スペクトラム障害では、対人交流の場での感情表現が乏しく、非言語的コミュニケーションを読み取ることが難しいことから⁽⁵⁾、患者との援助的関係の構築や医療チームの協働に関する学びを深めることは難しいと推察される。

一方、学生が抱える困難に対する支援として、他学部では保護者との連携、学習方法や社会的スキルの指導などが挙げられている⁽⁶⁾。支援者となる職種は、カウンセラーや医師などの専門職を除くと、教員が最も多い⁽⁷⁾。しかし、看護系大学は、カリキュラムが過密で、多くの教員が関わるため、一貫して支援することは難しい。また、臨地実習によっては生活習慣の変容が必要となる場合もあるが、発達障害のある学生は新しい環境への適応が難しいということも考え合わせると、教育上の困難だけでなく生活上の問題も含めた包括的な支援が必要であると考えられる。

看護系大学の増設に伴い、発達障害のある看護学生(以下、学生)も相対的に増加することが考えられるが、このような学生への支援については、検討され始めたばかりである。国外においても、臨地実習で学生に指導する看護師は、過去に発達障害に関連したトレーニングを受けていないため、十分に支援できていない現状があり⁽⁸⁾、関連する研究も行われていないことが指摘されている⁽⁹⁾。これらのことから、発達障害のある学生に対する支援体制の構築は急務であると考えられる。そこで本研究では、文献をもとに発達障害のある学生に対する教育上の困難と支援の現状について明らかにすることを目的とする。

Ⅱ. 方 法

1. 分析対象文献の選定方法

医学中央雑誌 Web 版(以下、医中誌)を用いて文献を選定した。発行年の制限は設けず、会議録を除いて、発達障害のある学生に対する教育上の困難や支援について具体的な記述がある文献を対象とした。なお、発達障害が疑われる学生を対象とした文献も対象とした。

「看護」and「学生」and「発達障害」をキーワードとして検索した場合は(検索実施日：2019/7/1)、114件の文献が該当した。また、「看護」and「学生」に、発達障害のなかでも知的能力は正常に保たれやすく、看護系大学への在学が推測される「自閉症スペクトラム障害」or「自閉症」を追加した場合は27件が、「注意欠如・多動性障害」or「注意欠陥・多動性障害」を追加した場合は22件が該当した。

医中誌において該当した文献のほとんどは、対象が異なっていたり、発達障害のある子どもの理解、あるいはその子どもや家族に対する支援に関する内容であったりしたため、発達障害のある学生に対する教育上の困難や支援について調査された文献は7件のみであった。

2. 分析方法

発達障害のある学生に対する教育上の困難や支援について調査された7件を分析対象とし、精読した上で、「調査方法」「発達障害のある学生に対する教育上の困難」「発達障害のある学生に対する支援」について整理した(表1)。

これらの一次文献のなかには、結果の一部分を質的帰納的に分析し、教育上の困難や支援に

ついて系統的にまとめているものが3件みられた^{(10)~(12)}。一方、あらかじめ想定される教育上の困難についての選択肢を提示し、該当するか否かを質問紙で調査したものが4件みられ^{(13)~(16)}、その選択肢は具体的な記述であった。

そこで本研究では、メタ統合の手法を参考に分析を行うこととした。メタ統合は、複数の質的研究の成果を統合し、新たな発見を導く研究デザインであるが、研究者は目的に応じて方法を試行錯誤している現状がある⁽¹⁷⁾。本研究で分析対象とした質的研究の一次文献は3件のみであったこと、その他の4件も選択肢として具体的な記述があったことを考え合わせると、「一次文献から記述を抽出し、現象を表す包括的な概念を生み出す方法」⁽¹⁷⁾を参考に分析が可能であると考えた。

そのため、一次文献のなかの具体的な記述をもとに、「発達障害のある学生に対する教育上の困難」と「発達障害のある学生に対する支援」を抽出し「記述内容」とした。そして、記述内容を類似性に沿って分類し「サブカテゴリ」として名称を付した。さらに、サブカテゴリを類似性に沿って分類し「カテゴリ」として名称を付した。

なお、分析については、共同研究者間で議論を重ねることで結果の精緻化を図った。

表1 一次文献の一覧

著者	発行人	テーマ	調査方法	発達障害のある学生に対する教育上の困難	発達障害のある学生に対する支援
中尾幹子, 田中千寿子, 豊島めぐみ ⁽¹⁰⁾	2015	看護基礎教育における学生への発達障害支援の現状	教員1名に半構造化面接法(印象に残るエピソードや指導困難場面、その時の対応、発達障害への理解や支援など)を行い、質的帰納的に分析を行った。	ひとつのことにこだわる傾向、新しい環境に慣れるのに時間がかかる傾向、すぐにパニックになる傾向、が挙げられていた。	学生自身の振り返りを促す、会話しやすくケアが少ない患者を受け持つなどの配慮、病院受診以外に学内の心理カウンセリングの活用、心理学の教員など多職種による連携、が挙げられていた。
山下知子, 徳本弘子 ⁽¹³⁾	2015	発達障害及び発達障害の疑いのある看護学生の臨地実習における学習困難の様相	教員267名に質問紙調査(実習で感じる違和感や学習困難だった事例など)を行い、KJ法で分析を行った。	違和感のある場面を選択肢から回答してもらった結果、周りの状況を見ながら実習を進められない(159校:82%)、表情や仕草などから相手の気持ちを読み取れない(146校:77%)、受け持ち患者とうまくコミュニケーションがはかれない(135校:69%)、グループメンバーと協力できない(133校:68%)、他者への共感が難しい(128校:66%)、教員や指導者の話を聞き逃すことが多い(124校:64%)、記録類など全般的に整理整頓が苦手である(124校:64%)、援助技術で同じミスを繰り返す(112校:57%)、記録を期日までに書くことができない(110校:56%)、メモしたことを忘れてしまう(96校:49%)、話している相手と視線が合わない(76校:39%)、同じ訴えを繰り返してくる(64校:33%)であった。その他にも、教員の話の聞いていないが意味をとり違えて受け止めたり認識がずれている、やっではいけないと禁止したことも相談せずに実施してしまう、ストレスがかかると大腸炎など身体症状がでてしまう、指摘されたことが次の時にはリセットされてしまう、攻撃的など感情のコントロールができない、失敗した時に嘘をついてごまかす、言葉を発しなかつ	記載なし。

				たり話ができない、が挙げられていた。学習困難であった事例の自由記述をまとめた結果、整理整頓が苦手な記録提出の期日などを忘れる、提出先を間違えるなどのトラブルが発生しやすい、文章の意味を読み取り自分の考えを整理して書くことができない、看護のアセスメントができないため実習目標を達成できない、自己判断や不注意で思いつきの行動をとる、状況にそぐわない奇異な行動をとるため患者の安全を保てない、患者の予定を考えず自己の意見を押し付けたり考えにこだわり患者ではなく自分中心に援助を考えてしまう、会話時や援助時に適切な声掛けができない、予期しない出来事には対応できず現実逃避するため患者と関係が気付けず援助に至らない、患者の仕草や苦痛表情の意味を理解できず思いを察することができないため看護を考えられない、指導者・教員・メンバーとコミュニケーションがとれずグループ活動が円滑にできない、繰り返し指導するが記憶を留めることができず援助場面が再生できず看護の振り返りができない、が挙げられていた。	
山下知子、 徳本弘子 ⁽¹¹⁾	2016	看護師養成機関における学生支援体制と、発達障害および発達障害の疑いのある看護学生の臨地実習における支援	教員267名に質問紙調査(学内支援体制、実習中の学生支援など)を行い、質的帰納的な分析を行った。	記載なし。	支援の内容を選択肢から回答してもらった結果、なぜそのような言動や行動をしたのか学生から話を聞く(174校：65%)、教員間で連携をはかり統一した態度で接する(174校：65%)、学生との面接内容はすべて記録に残す(139校：52%)、指導するときには諭えなどを使わず短く直接的に話す(118校：44%)、同時に2つ以上の指示を出さない(116校：43%)、本人にカウンセリングを受けるようすすめる(112校：42%)、指導項目で覚えておいてほしいことは紙に書いて渡す(83校：31%)、本人に専門医療機関の受診をすすめる(70校：26%)、学生がどのようなコミュニケーションをしているか教員がロールプレイをしてみせる(42校：16%)、学内で発達障害の学習会を行い教員間の理解を深める(35校：13%)、本人がパソコンで記録を書く希望があれば認める(17校：6%)、病院内で迷わないよう同一場所で待ち合わせる(10校：4%)、本人にセルフヘルプ・グループを勧める(4校：1%)、の順に多かった。支援についての自由記述をまとめた結果、本人・家族との面談、具体的な指示、メモなど指導内容の確認、学内外連携、本人のペースの尊重、行動の振り返り、が挙げられていた。
中尾幹子 ⁽¹²⁾	2017	発達障害の特徴がみられた看護学生の進路変更支援	教員4名に半構造化面接法(印象に残るエピソードや指導困難場面、支援についてなど)を行い、修正版グランドレッド・セオリー・アプローチによる分析を行った。	問題行動の診断がはっきりしない、自己コントロールの困難さ、倫理観の低い自己中心的な態度、仲間学生の我慢と他学生への悪影響、が挙げられていた。	教員全体での意思統一、欠席中の心理サポート、本人・保護者に対する学習継続困難についての説明、が挙げられていた。
戸部郁代 ⁽¹⁴⁾	2018	看護教員における発達障害学生に対する意識と修学支援の現状	教員534名に質問紙調査(発達障害の学生の支援における課題と合理的配慮についての現状、看護師としての資質における適性など)を行い、記述統計的に分	突発的な事態に落ち着いて対処できない、視野が狭く多面的に物事を見られない、他の人々と意思疎通ができない、他人と協力して仕事ができない、患者の気持ちが分からず共感的でない、自分の感情をコントロールできない、リーダーシップがとれない、他人の意見に耳を傾けることができない、価値観の多様性を認めることができない、他人を尊重できない、患者・同僚・上司から信頼されない、計	教員の発達障害のある学生への理解、職員の発達障害のある学生への理解、周囲の学生の発達障害のある学生への理解、発達障害のある学生の自己理解、発達障害のある学生の保護者の理解、支援体制・部署間の連携、が挙げられていた。

発達障害のある看護学生に対する教育上の困難と支援に関する文献検討

			析を行った。	画的に行動できない、論理的な思考ができない、主体的に行動できない、忍耐力がない、技術を正確に実施できない、笑顔がなく親しみがなく、感性が豊かでない、が挙げられていた。	
師岡友紀, 望月直人, 荒尾晴恵 ⁽¹⁵⁾	2019	発達障害またはその傾向がある看護学生に対する臨地実習上の支援の実態と教員の支援の妥当性に関する認識	教員159名に質問紙調査(臨地実習で実施した48項目の支援に対して、必要だった程度など)を行い、記述統計的に分析を行った。	記載なし。	実習前では、他教員と支援のあり方を相談、他教員と学生に関して情報共有、個別面談の機会を設定、発達障害の知識を深めた、学生の言動や面談内容を記録、実習時の支援のあり方を提案、学生の自身の特性の自己理解を促す、学生の要望をくみ取る、指導看護師に学生の特性を説明、指導看護師に発達障害の知識を説明、実習施設管理者に学生の特性を説明、技術練習の時間を追加、精神的安定を図れるスペースを準備、専門家と相談する機会を設定、学生の家族と面談、専門機関との連携を調整、同グループ学生に発達障害について説明、予備実習の実施、同グループ学生に学生の特性を説明、受け持ち患者に学生の特性を説明の順に多かった。 実習中では、コミュニケーション方法を工夫、患者への関わり方をより具体的に説明、記録すべき内容をより具体的に指導、話を聴く機会をより多く設定、患者の言動の意味合いを補足説明、指導看護師と教員で統一した態度で接する、看護師の指導内容を補足説明、患者に関わる際に看護師に付き添ってもらう、計画発表や報告をする際に教員等が立ち会う、患者に関わる際に教員等が付き添う、技術のシミュレーションを実施、カンファレンスで学生が発言できるように介入、指導看護師にコミュニケーション方法の工夫を依頼、カンファレンスで学生の発言を補足説明、カンファレンスで発言がなくても許容、記録作成時にパソコンの使用を許可、他学生と異なるスケジュールでの記録作成を許可、同グループ学生にコミュニケーション工夫を依頼、休憩時間以外の休憩を許可、専門家に実習の場に来てもらう、の順に多かった。 実習後では、評価をわかりやすく伝える、進路について話し合う、専門機関の受診を勧める、記録の提出期限を延長、減点を緩和、ベッドサイドの言動の代替で記録を評価、目標の達成度をかさ上げして評価、異なる評価基準を用いる、の順に多かった。
中村裕美, 高橋 幸, 福井彩水, 田野将尊, 伊藤桂子, 田中留伊 ⁽¹⁶⁾	2019	発達障害およびその疑いのある学生に対する看護系大学教員の関わり方の現状と支援のあり方	教員39名に質問紙調査(独立行政法人国立特別支援教育総合研究所の支援方法を参考に、大学で行われている支援など)を行い、推量統計的に分析を行った。	協調性を発揮することが苦手、指示を聞き逃すことが多い、急な予定変更への対応が苦手、こだわりが強く、理解・共感が苦手、周りに孤立することが多い、出し抜けた発言・質問が多い、優先順位をつけることが困難、他者の嫌がる発言が多い、が挙げられていた。	教員との情報共有、個別面談・相談、褒めて自信をもたせる、実習配置、実習中に個別に指導、受け持ち患者の決定の際、病院側と連携、機関の紹介、学内の他の教員の紹介、個別に進路相談、他学生に協力依頼、補講、要点をまとめた紙を配布、の順に多かった。

Ⅲ. 結 果

1. 発達障害のある学生に対する教育上の困難

発達障害のある学生に対する教育上の困難に関しては、60の記述内容が抽出され、そこから11のサブカテゴリが生成された。さらに、【患者の思いに寄り添うことの困難さ】【自己統制の

困難さ】【グループダイナミクス活用の不十分さ】【論理的な思考の困難さ】【指導の集積の困難さ】の5のカテゴリが生成された(表2)。

1) 患者の思いに寄り添うことの困難さ

このカテゴリは、《患者の気持ちの読み取りの困難さ》《患者を尊重した関わりの困難さ》のサブカテゴリから生成された。

2) 自己統制の困難さ

このカテゴリは、《状況に応じた発言の困難さ》《自己の感情統制の困難さ》《予期しない出来事への対応の困難さ》のサブカテゴリから生成された。

3) グループダイナミクス活用の不十分さ

このカテゴリは、《グループ内での協力の困難さ》《状況の客観視の困難さ》のサブカテゴリから生成された。

4) 論理的な思考の困難さ

このカテゴリは、《論理的な情報整理の困難さ》《優先順位に基づく行動の困難さ》のサブカテゴリから生成された。

5) 指導の集積の困難さ

このカテゴリは、《指導内容の関連付けの困難さ》《多面的な物事の理解の困難さ》のサブカテゴリから生成された。

表2 発達障害のある学生に対する教育上の困難

カテゴリ	サブカテゴリ	記述内容
患者の思いに寄り添うことの困難さ	患者の気持ちの読み取りの困難さ	話している相手と視線が合わない 表情や仕草などから相手の気持ちを読み取れない 他者への共感が難しい 患者の気持ちが入らず共感的でない こだわりが強く、理解・共感が苦手である 受け持ち患者とうまくコミュニケーションが図れない 他者の嫌がる発言が多い 感性が豊かでない
	患者を尊重した関わりの困難さ	倫理観の低い自己中心的な態度をとる 自己判断や不注意で思いつきの行動をとる やっつけはいけないと禁止したことも相談せず実施してしまう 会話時援助時に適切な声掛けができない 患者の仕草や苦痛表情の意味を理解できず思いを察することができないため看護を考えられない 他人を尊重できない
自己統制の困難さ	状況に応じた発言の困難さ	出し抜けた発言・質問が多い 他の人々と意思疎通ができない 言葉を発しなかつたり話ができない 失敗した時に嘘をついてごまかす
	自己の感情統制の困難さ	笑顔がなく親しみがない 攻撃的な感情のコントロールができない 自己コントロールの困難さがある 自分の感情をコントロールできない 状況にそぐわない奇異な行動をとるため患者の安全を保てない ストレスがかかると大腸炎など身体症状がでてしまう すぐにパニックになる傾向がある
	予期しない出来事への対応の困難さ	突発的な事態に落ち着いて対処できない 新しい環境に慣れるのに時間がかかる傾向がある 予期しない出来事には対応できず現実逃避するため患者と関係が築けず援助に至らない 急な予定変更への対応が苦手である

グループダイナミクス活用の不十分さ	グループ内での協力の困難さ	リーダーシップがとれない グループメンバーと協力ができない 他人と協力して仕事ができない 指導者・教員・メンバーとコミュニケーションがとれずグループ活動が円滑にできない 協調性を発揮することが苦手である
	状況の客観視の困難さ	周りから孤立することが多い 周りの状況を見ながら実習を進められない
論理的な思考の困難さ	論理的な情報整理の困難さ	整理整頓が苦手で記録提出の期日などを忘れる メモしたことを忘れてしまう 提出先を間違えるなどのトラブルが発生しやすい 教員や指導者の話を聞き逃すことが多い 指示を聞き逃すことが多い 看護のアセスメントができないため実習目標を達成できない 論理的な思考ができない 文章の意味を読み取り自分の考えを整理して書くことができない 記録類など全般的に整理整頓が苦手である 記録を期日までに書くことができない
	優先順位に基づく行動の困難さ	ひとつのことにこだわる傾向がある 患者の予定を考えず自己の意見を押し付けたり考えにこだわり患者ではなく自分中心に援助を考えてしまう 優先順位をつけることが困難である 計画的に行動できない 主体的に行動できない
	指導内容の関連付けの困難さ	同じ訴えを繰り返してくる 繰り返し指導するが記憶を留めることができず援助場面が再生できず看護の振り返りができない 指摘したことが次の時にはリセットされてしまう 教員の話聞いているが意味をとり違えて受け止めたり認識がずれている 援助技術で同じミスを繰り返す 技術を正確に実施できない
	多面的な物事理解の困難さ	他人の意見に耳を傾けることができない 価値観の多様性を認めることができない 視野が狭く多面的に物事をみられない

2. 発達障害のある学生に対する支援

発達障害のある学生に対する支援に関しては、59の記述内容が抽出され、そこから15のサブカテゴリが生成された。さらに、【自己統制力を高める支援】【援助場面の構造化による理解の促進】【言語情報の理解と表出の促進】【達成可能な方法への変更】【支援体制のマネジメント】の5のカテゴリが生成された(表3)。

1) 自己統制力を高める支援

このカテゴリは、《自身の特性に対する理解の促進》《精神的な安定の保持への支援》のサブカテゴリから生成された。

2) 援助場面の構造化による理解の促進

このカテゴリは、《患者の言動の意図の説明》《援助場面の構造化による振り返り》《援助経験の蓄積の支援》のサブカテゴリから生成された。

3) 言語情報の理解と表出の促進

このカテゴリは、《具体的で端的な指導》《学生の思考の推察による代言》《視覚情報による指導》のサブカテゴリから生成された。

4) 達成可能な方法への変更

このカテゴリは、《評価基準の調整》《記録方法の変更》《学生に合ったスケジュールの調整》のサブカテゴリから生成された。

5) 支援体制のマネジメント

このカテゴリは、《教育関係者の情報共有による対応の統一》《教育関係者の発達障害への理解の促進》《周囲の学生の発達障害への理解の促進》《専門機関による支援の活用》のサブカテゴリから生成された。

表3 発達障害のある学生への支援

カテゴリ	サブカテゴリ	記述内容
自己統制力を高める支援	自身の特性に対する理解の促進	発達障害のある学生の自己理解を促す 学生の自身の特性の自己理解を促す 自身の振り返りを促す
	精神的な安定の保持への支援	精神的安定を図れるスペースを準備する 褒めて自信をもたせる
援助場面の構造化による理解の促進	患者の言動の意図の説明	患者に関わる際に教員等が付き添う 患者の言動の意味合いを補足説明する 患者に関わる際に看護師に付き添ってもらう
	援助場面の構造化による振り返り	学生がどのようなコミュニケーションをしているか教員がロールプレイをしてみせる 患者への関わり方をより具体的に説明する なぜそのような言動や行動をしたのか学生から話を聞く 行動の振り返りを促す
言語情報の理解と表出の促進	援助経験の蓄積の支援	技術のシミュレーションを実施する 技術練習の時間を追加する 予備実習を実施する
	具体的で端的な指導	指導するときは喩えなどを使わず短く直接的に話す 同時に2つ以上の指示を出さない 具体的な指示を出す 記録すべき内容をより具体的に指導する
	学生の思考の推察による代言	カンファレンスで学生が発言できるように介入する 学生の要望をくみ取る カンファレンスで学生の発言を補足説明する 計画発表や報告をする際に教員等が立ち会う
達成可能な方法への変更	視覚情報による指導	指導項目で覚えておいてほしいことは紙に書いて渡す 要点をまとめた紙を配布する メモなどで指導内容を確認する
	評価基準の調整	異なる評価基準を用いる 目標の達成度をかさ上げして評価する 減点を緩和する 会話しやすくケアが少ない患者を受け持つなどの配慮を行う カンファレンスで発言がなくても許容する
	記録方法の変更	ベッドサイドの言動の代替で記録を評価する 本人がパソコンで記録を書く希望があれば認める 記録作成時にパソコンの使用を許可する
支援体制のマネジメント	学生に合ったスケジュールの調整	他学生と異なるスケジュールでの記録作成を許可する 休憩時間以外の休憩を許可する 本人のペースを尊重する 記録の提出期限を延長する 病院内で迷わないよう同一場所で待ち合わせる
	教育関係者の情報共有による対応の統一	他教員と学生に関する情報共有を行う 教員間での情報共有を行う 指導看護師に学生の特性を説明する 実習施設管理者に学生の特性を説明する 教員全体での意思統一を図る 教員間で連携を図り統一した態度で接する 指導看護師と教員で統一した態度で接する
	教育関係者の発達障害への理解の促進	学内で発達障害の学習会を行い教員間の理解を深める 教員の発達障害のある学生への理解を深める 職員の発達障害のある学生への理解を深める 指導看護師に発達障害の知識を説明する
	周囲の学生の発達障害への理解の促進	周囲の学生の発達障害のある学生への理解を深める 同グループ学生に発達障害について説明する 同グループ学生に学生の特性を説明する

専門機関による
支援の活用

病院受診以外に学内の心理カウンセリングへの相談を促す
本人に専門医療機関の受診をすすめる
本人にカウンセリングを受けるようすすめる
本人にセルフヘルプ・グループを勧める
専門家と相談する機会を設定する
専門機関の受診を勧める

IV. 考 察

1. 発達障害のある学生に対する教育上の困難

本研究では発達障害のある、または発達障害が疑われる学生を対象とした文献を分析対象とした。そのため、一次文献で教育の対象となっているのは、発達の凸凹がみられる広範な自閉症発現型⁽¹⁸⁾、知的能力障害はないが、聞く、話す、読む、計算する、推論することに困難がある自閉症スペクトラム障害や注意欠如・多動性障害のうち⁽⁵⁾、極めて軽度の者などであることが推察できる。

【患者の思いに寄り添うことの困難さ】には《患者の気持ちの読み取りの困難さ》と《患者を尊重した関わりの困難さ》のサブカテゴリが含まれた。これらは、自閉症スペクトラム障害の特性である社会的コミュニケーション障害が影響し⁽⁵⁾、臨地実習の場面において患者の気持ちを推察したコミュニケーションが困難なためであると推察された。さらに、短い臨地実習の期間で、学生の共感性の低さを、特性であると理解することは難しく、それにより生じた軋轢は、学生の【自己統制の困難さ】の《自己の感情統制の困難さ》を助長させていると考えられた。また、患者の気持ちを推察し、尊重することの困難さは、看護師の職業倫理の欠如にもなり得るため、約7割もの教員が発達障害のある学生は看護師としての資質に問題があると捉えていること⁽¹⁴⁾に関連している可能性がある。

看護基礎教育では、グループで臨地実習に臨むことが多いため、学習効果はグループ間の人間関係などが大きく影響することが明らかになっている⁽¹⁹⁾。社会的コミュニケーション障害は患者に対してだけでなく、グループメンバーとの関係性にも影響すること、教員は発達障害のある学生への指導に時間をとられ、他のグループメンバーに十分な指導が行えないこと⁽¹²⁾などにより、【グループダイナミクス活用の不十分さ】が教育上の困難として示されていると推察された。

【論理的な思考の困難さ】には《論理的な情報整理の困難さ》や《優先順位に基づく行動の困難さ》のサブカテゴリが、【指導の集積の困難さ】には《指導内容の関連付けの困難さ》のサブカテゴリが含まれた。通常、学生は指導された情報の重要度を考え、さらに情報の関連性を見出しながら整理して学習していく。しかし、発達障害のある学生は、いわゆるこだわりが強い⁽⁵⁾、物事を論理的に捉えられず、情報を整理しながら学習することが困難である。そのため、指導したことが積み重ならず、解釈を広げながら情報を収集することも難しい状況となる。教員や指導者は、何度も同様の指導をしなければならず、学生の理解度に疑問を抱くた

め、陰性感情を引き起こし、否定的に関わっていたり⁽²⁰⁾、支援的に関わることができなかつたりするおそれもあり⁽²¹⁾、懸念されることである。

2. 発達障害のある学生に対する支援

発達障害のある学生は、種々の困難を抱えていても、教員などの支援者との信頼関係を土台に、客観的な評価を受けとめることができるようになるため、自己理解が進み、現実的な目標設定が可能で⁽²²⁾、教育効果も望める⁽²³⁾。そのため、看護学に関心をもち、看護師として働くという希望をもつ学生への支援体制の構築は急務である。看護基礎教育におけるこのような学生に対する支援のあり方については、検討され始めたばかりではあるが、他学部においては学生相談室での面談を通して直接的、間接的な支援を行っている⁽²⁴⁾。

学生相談室での直接的な支援として、対人関係の改善を目指したソーシャル・スキル・トレーニング、セルフモニタリングやスケジュール管理による日常生活のマネジメントなどが行われている⁽²⁵⁾⁽²⁶⁾。これらは、本研究では【自己統制力を高める支援】や【援助場面の構造化による理解の促進】【言語情報の理解と表出の促進】にあたる。

【自己統制力を高める支援】には〈褒めて自信をもたせる〉の記述内容が含まれ、自己肯定感が低い発達障害のある学生を支えるために重要な関わりであることが窺えた。このような関わりを通して、学生が自身の特性を理解し、困難な状況を乗り越えられる自分なりの方法を模索していくよう支援する必要があると考えられた。

【援助場面の構造化による理解の促進】には《患者の言動の意図の説明》のサブカテゴリが、【言語情報の理解と表出の促進】には《視覚情報による指導》のサブカテゴリが含まれた。これらは、臨地実習における患者の心情を推し量るとともに、具体的または視覚的に学生が理解できる方法で指導する必要があることを示していた。また、《援助経験の蓄積》のサブカテゴリには〈技術のシミュレーションを実施する〉の記述内容が含まれた。学生が援助場面を繰り返し経験すること、または他の学生の援助場面を知るとは、発達障害者に対するソーシャル・スキル・トレーニングの有用性⁽²⁷⁾を考え合わせると、有効的な支援であると推察された。

一方、【達成可能な方法への変更】には、〈異なる評価基準を用いる〉や〈目標の達成度をかさ上げして評価する〉〈減点を緩和する〉の記述内容が含まれた。しかし、教員は単位の認定や卒業に重きを置くのではなく、看護基礎教育で必要な看護実践能力の修得や、卒業後に看護師として働くための適性などを考慮しながら、目標の達成状況を見定める必要がある。そのうえで、発達障害の特徴を考慮した妥当な合理的な配慮⁽²⁸⁾を図る必要がある。

間接的な支援として、教員同士や保護者との情報共有⁽²⁹⁾、周囲の学生による支援⁽³⁰⁾、大学と実習先⁽³¹⁾や医療との連携⁽³²⁾による支援が挙げられていた。これらは、本研究では【支援体制のマネジメント】にあたる。保護者は必ずしも発達障害に関する十分な知識を有しているわけではなく、説明や助言を受け容れてもらえない場合もあるが、学生への支援のためには協力関係を形成することが重要である⁽³³⁾。そのため、教員は学生の学習状況のみに焦点を当てる

のではなく、生活上の困難についても配慮し、周囲の他者から適切な支援が受けられるように調整することが、支援的なネットワークの構築⁽³⁴⁾のために重要であると考えられた。

また、《専門機関による支援の活用》のサブカテゴリには〈本人にセルフヘルプ・グループを勧める〉の記述内容が含まれていた。セルフヘルプ・グループは、同様の問題や悩みをもっている当事者同士が自発的に結びつくため、学生にとって最小の負担でサポート関係を築くことができる⁽³⁵⁾。その様な場を通して、困難感を互いに表出し合うことによって、自己統制力を高めることにもつながる可能性があると考えられた。

支援体制には、心理的支援のために必要な専門医療機関のほか、実習を行う病院との協働が含まれた。さらに、他学部では就職に際してインターンシップへの参加を促す支援をしているという報告がある⁽³⁶⁾。インターンシップは職業意識の育成につながるため⁽³⁷⁾、具体的な職業生活を想定できる可能性がある。看護師においても約半数でインターンシップを実施しているという報告があるため⁽³⁸⁾、大学と病院との協働によって支援を強化できる可能性があると考えられた。

V. 本研究の限界と課題

本研究では、発達障害のある、または発達障害が疑われる学生を対象とした文献を収集したが、該当したのは7件のみであった。本研究結果以外にも様々な教育上の困難があったり、支援が行われていたりする可能性がある。そのため、さらなる調査が必要である。

本研究はメタ統合を参考に分析を行った。メタ統合は、一般的には質的研究の結果を用いる。本研究の一次文献のなかには質問紙調査も含まれるが、その項目は具体的な内容であったため分析の対象とした。また、一次文献間の知見や解釈について異なる視点から一次文献を分析する方法については明確となっていない⁽³⁷⁾。これらのことが本研究の限界である。

VI. 結 語

本研究では、文献をもとに発達障害のある学生に対する教育上の困難と支援の現状について明らかにすることを目的とした。目的に沿った内容の文献はほとんどみられなかったが、該当した7件の文献を精読し、メタ統合の手法を参考に分析したところ、以下の内容が明らかになった。

発達障害のある学生に対する教育上の困難には【患者の思いに寄り添うことの困難さ】【自己統制の困難さ】【グループダイナミクス活用の不十分さ】【論理的な思考の困難さ】【指導の集積の困難さ】があった。これらは、発達障害である自閉症スペクトラム障害の特性である社会的コミュニケーション障害や興味の限局が影響していることが推察された。

一方、発達障害のある学生に対する支援には【自己統制力を高める支援】【援助場面の構造

化による理解の促進】【言語情報の理解と表出の促進】【達成可能な方法への変更】【支援体制のマネジメント】があった。これらは、他学部でも行われている直接的、間接的な支援と符合していたが、実習や卒後の看護師としての職務を想定した支援については、さらなる検討が必要である。

本研究における利益相反は存在しない。

文献

- (1) http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/113/shiryo/_icsFiles/afieldfile/2015/07/08/1359123_07.pdf (2019.5.8)
- (2) https://www.jasso.go.jp/gakusei/tokubetsu_shien/chosa_kenkyu/chosa/_icsFiles/afieldfile/2019/03/15/report2018.pdf (2019.5.8)
- (3) <http://www.janpu.or.jp/> (2019.5.8)
- (4) <https://kaken.nii.ac.jp/ja/file/KAKENHI-PROJECT-21659496/21659496seika.pdf> (2019.5.8)
- (5) 青木省三. 発達障害およびその他の児童期の精神疾患. 尾崎紀夫, 朝田隆, 村井俊哉編, 351-366, 標準精神医学第6版, 医学書院, 東京, 2015.
- (6) 山下京子. 大学における発達障害のある学生の支援体制について. 広島女学院大学論集, 63, 129-143, 2016.
- (7) 丹治敬之, 野呂文行. 我が国の発達障害学生支援における支援方法および支援体制に関する現状と課題. 障害科学研究, 38, 147-161, 2014.
- (8) L'Ecuyer K M. Perceptions of nurse preceptors of students and new graduates with learning difficulties and their willingness to precept them in clinical practice (Part 2). Nurse Edu Pract, 34, 210-217, 2019.
- (9) L'Ecuyer K M. Clinical education of nursing students with learning difficulties: An integrative review (part 1). Nurse Educ Pract, 34, 173-184, 2019.
- (10) 中尾幹子, 田中千寿子, 豊島めぐみ. 看護基礎教育における学生への発達障害支援の現状. 大阪信愛女学院短期大学紀要, 49, 15-25, 2015.
- (11) 山下知子, 徳本弘子. 看護師養成機関における学生支援体制と、発達障害および発達障害の疑いのある看護学生の臨地実習における支援. 日本看護学会論文集 看護教育, 46, 147-150, 2016.
- (12) 中尾幹子. 発達障害の特徴がみられた看護学生の進路変更支援. 発達障害研究日本発達障害学会機関誌, 39(1), 91-103, 2017.
- (13) 山下知子, 徳本弘子. 発達障害及び発達障害の疑いのある看護学生の臨地実習における学習困難の様相. 埼玉医科大学看護学科紀要, 9(1), 11-17, 2015.
- (14) 戸部郁代. 看護教員における発達障害学生に対する意識と修学支援の現状. 発達障害研究 日本発達障害学会機関誌, 40(2), 165-174, 2018.
- (15) 師岡友紀, 望月直人, 荒尾晴恵. 発達障害またはその傾向がある看護学生に対する臨床実習上の支援の実態と教員の支援の妥当性に関する認識. 大阪大学看護学雑誌, 25(1), 81-88, 2019.
- (16) 中村裕美, 高橋幸, 福井彩水, 田野将尊, 伊藤桂子, 田中留伊. 発達障害およびその疑いのある学生に対する看護系大学教員の関わりの現状と支援のあり方. 看護教育研究学会誌, 11(1), 47-56, 2019.
- (17) 山下暢子, 三浦弘恵, 松田安弘. メタ統合を用いた看護学研究的現状: 分析方法に焦点を当てて. 群馬県立県民健康科学大学紀要, 4, 77-89, 2009.
- (18) 杉山登志郎. 第1章 発達障害とは何か. 杉山登志郎編, 発達障害への看護アプローチ, 10-34, 精神看護出版, 東京, 2011.

- (19) 水口洋子. 看護学実習グループの人間関係に関する文献研究. 新潟県立看護短期大学紀要, 9, 3-11, 2004.
- (20) Ridley C. The experiences of nursing students with dyslexia. Nurs Stand, 25(24), 35-42, 2011.
- (21) Kolanko K M. A collective case study of nursing students with learning disabilities. Nurs Educ Perspect, 24(5), 251-256, 2003.
- (22) 高瀬智恵, 今村佐智子, 奥村弥生, 小脇智佳子, 松久眞実. 発達障害学生の自己理解を進めるためのアプローチ: 就労に向けた支援システムにつなげた事例から. プール学院大学紀要, 57, 303-317, 2016.
- (23) 田中敦士, 野原奈々子. 大学教員における障害学生への障害理解の実態. 琉球大学教育学部紀要, 71, 119-146, 2007.
- (24) 楠本久美子, 八木成和, 広瀬香織. 大学・短期大学における発達障害及びその疑いのある学生への支援の現状と課題. 四天王寺大学紀要, 49, 447-460, 2010.
- (25) 田澤実. 発達障害のある大学生の就職支援. 生涯学習とキャリアデザイン, 10, 53-65, 2013.
- (26) 井野英江, 飯田由美, 佐々木司. 広汎性発達障害(PDD)の大学生の学生生活に対する支援方法の検討: 症例の検討を通して. 臨床精神医学, 38(12), 1779-1788, 2009.
- (27) 山本真也, 香美裕子, 小椋瑞恵, 井澤信三. 高機能広汎性発達障害者に対する就労に関するソーシャルスキルの形成におけるSSTとシミュレーション訓練の効果の検討. 特殊教育学研究, 51(3), 291-299, 2013.
- (28) 高橋知音, 高橋美保. 発達障害のある大学生への「合理的配慮」とは何か: エビデンスに基づいた配慮を実現するために. 教育心理学年報, 54, 227-235, 2015.
- (29) 佐藤克敏, 徳永豊. 高等教育機関における発達障害のある学生に対する支援の現状. 特殊教育学研究, 44(3), 157-163, 2006.
- (30) 宮崎紗織, 中田洋二郎, 佐藤秀行, 永井智, 田村英恵. 発達障害特性による大学生生活の困難性への支援: 自閉症スペクトラム障害に対する大学生の援助意識に関する調査. 立正大学臨床心理学研究, 13, 19-29, 2015.
- (31) https://www.jasso.go.jp/gakusei/tokubetsu_shien/chosa_kenkyu/chosa/_icsFiles/afiedfile/2018/08/06/report2016_2017.pdf (2019.5.8)
- (32) 福田真也. 大学生の発達障害: 大学と医療との連携、および就労支援. こころの健康, 32(1), 15-23, 2017.
- (33) 渡辺頭一郎, 田中尚樹. 発達障害児に対する「気になる段階」からの支援: 就学前施設における対応困難な実態と対応策の検討. 日本福祉大学子ども発達学論集, 6, 31-40, 2014.
- (34) White J. Supporting nursing students with dyslexia in clinical practice. Nurs Stand, 21(19), 35-42, 2007.
- (35) 上岡義典. 組織的でない発達障がい学生へのピアサポートの重要性と可能性. リメディアル教育研究, 9(2), 144-148, 2014.
- (36) 石井恒生. 大学における発達障害学生の支援: 現状と課題. 近畿医療福祉大学紀要, 12(1), 21-28, 2011.
- (37) https://www.jasso.go.jp/gakusei/career/internship/seisaku/_icsFiles/afiedfile/2017/11/02/jasso_hebseb1.pdf (2019.5.8)
- (38) 鈴木恵, 本多和子. 看護師インターンシップの実施状況と採用との関連: 神奈川県の実態調査から. 日本看護管理学会誌, 18(1), 47-55, 2014.
- (39) 植村直子, 宮崎美砂子. 看護学雑誌におけるメタ統合研究の動向: 2005年から2014年に出版された国内外論文の検討. 千葉看護学雑誌, 21(2), 45-54, 2016.